幸せのものさし

森本毅郎

のものさし

森本毅郎

講談社

幸せのものさし
昭和六十年十一月二十日　第一刷発行

著者――森本毅郎（もりもとたけろう）
© Takeroo Morimoto 1985, Printed in Japan
発行者――野間惟道
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二　電話東京〇三―九四五―一一一一（大代表）
印刷所――信毎書籍印刷株式会社　製本所――大製株式会社
定価――一〇〇〇円
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-201499-8(0)　（文1）

目次

第一章　門

百日紅　11
ランドセル　14
好きな色　17
門　22
日記　26
読書　31
夏休み　36
夢の国　39

第二章　見つめる眼

早起き　45
あなたへのメッセージ　48
ファンレター　51
猫の毛　54
餅　57
膳　60
住所録　63
曼珠沙華　66
簞笥　69
外苑桜想　72
気球と着物　75

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

自尊心 79
本音 82
人形 85
見つめる眼 88
オートバイ 91
一年の計 94
サンバ 96
ラリー 99
らっきょう 102
共有財産 105
静かな名人 107
花 113

第三章　砂の旅

瀬戸の夕凪　117
津山の秋雨　120
比叡の僧　123
九十九島暮色　126
神戸渦ヶ森　129
宍道湖回想　132
釧路の鶴　135
善光寺裏　138
太田川夜景　141
中間人　144
砂の旅　147

第四章　マイ・ウェイ

幸せのものさし　163
早めし　168
電話　170
1LDK　173
意気けんこう　176
ピンカラー　179
ネクタイ　182
靴下　185
髪　187
ポケットチーフ　190
言葉のおしゃれ　193

転機 196
マイ・ウェイ 199
シャッターチャンス 204
パーティ 207
顔 215
あとがき 228

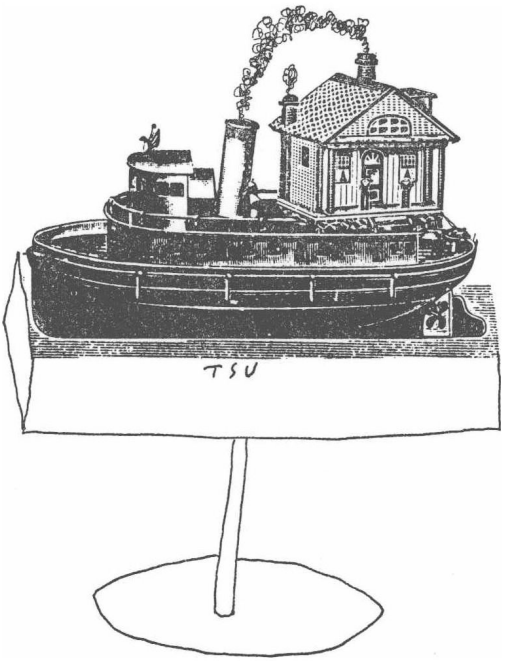
装幀 司修

幸せのものさし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章

門



百日紅

百日紅の咲く季節になると、私は自分の生れた中野の家を思い出す。木造の平屋、六つほどあった部屋を回縁が巡っていて、横長の庭は大和塀に囲まれていた。塀の下には檜が植えこまれていたような気がするが、何よりもはっきり覚えているのは、居間の正面にあった百日紅の木である。大きくも小さくもない中木で、桃色の花がよく咲いた。

私は七人兄弟の末っ子で、すぐ上の姉と七つも年が離れていたから、兄弟には相手にされず、遊び相手はもっぱら隣の貞ちゃんという一つ年上の女の子だった。百日紅の木の下に莫蓙を敷いてままごと遊びをする。二人はいつも夫婦だった。昭和十八年、太平洋戦争が激しさを増して、米や黒砂糖、それに炭なども配給の時代だった。

「おとうさん、おいもの御飯はいやですか」

女房役の貞ちゃんが聞く。

「いやだよ」
と私が答えるのを、母は回縁に立ったまま黙って聞いていたそうだ。
ある日、近くのお宮さんで飴が売り出された。
「たけちゃんを貸して」
近所の奥さんが母の所へ頼みに来た。子供を連れて行くと二人分の飴が貰えるからだ。私はその奥さんの背中で、かなり長いあいだ列に並んでいたらしい。やがて雨が降り出した。気を揉んだ母はお宮まで走った。しかし列の中ほどにいる奥さんは、
「大丈夫ですよ、雨が激しくなったら木蔭に入るから」
と笑っただけだった。私を返してもらえなかった母は、仕方なく一人で家に戻った。
たばこも売り出されると長い列ができ、あっという間に売り切れた。ヘビースモーカーだった父は、二番目の姉を連れて列に加わった。二人分のたばこを手に入れようというのである。離れて並べばよいものを、二人が続いてたばこを受け取ろうとすると、
「親子でしょう、よく似ているもの。いけませんよ、そんなこと」
とたばこ屋が言う。父も姉も必死になって、
「親子じゃない、親子じゃない」
と言い張った。

一番上の兄は利かん気の暴れん坊だった。近所の女の子を通せんぼしたり、追いかけたりする。とうとう、兄の姿を見ると女の子たちは、兄が何もしないうちから遠くの方で、

「おかあさん、哲郎さんがいけないの」

と叫んで逃げ出した。おかげで、父によく叱られた兄は、百日紅の木にたびたび縛られた。他の兄弟は、面白がってはやしたてたが、そのたびに兄は、

「おぼえていろ、あとでお前の教科書、くちゃくちゃにしてやる」

と木の上から毒づいた。

考えてみると、私と兄とは十五も年が違うのだから、十二、三歳の兄が縛られている姿を私が見ているはずなどないのだが、百日紅にぐるぐる巻きになっている兄を、私は確かに見たような気がするのだ。

兄弟が集ってそんな昔話に興じていると、母はつくづくと、あの時代はいやな思い出が多すぎるという。しかし私は、貞ちゃんと食べたおいもの御飯は結構おいしかったし、配給の列に並んだのも楽しかったように思えるのだ。そして今でも、中野の家の百日紅の花が、僕の幼年時代の原風景のように、ぼおっと光って見えるのである。

ランドセル

私が成城学園の初等科に入学したのは昭和二十一年、敗戦の翌年である。当時、わが家は世田谷の喜多見町に借家住まいをしていたから、成城学園は小田急線で一駅だった。二間しかない小さな借家に家族九人がすし詰の生活だったにもかかわらず、両親が何故ブルジョワ学校の成城などに私を入れたのか、今考えると不思議である。

私は勿論、電車など乗らず学校まで歩いてかよった。朝、家を出るときは七つも年の離れているすぐ上の姉といっしょである。姉も成城の中等部にかよっていた。だが、歩き出した途端、姉の足は早くなる。

「何してるの、遅れちゃうから早く歩いてよ」

姉はふり返ってはいらだったように言う。その声を聞くと私はもう一緒に並んで歩く気になれず、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c